

(咄しのだい) か かわつたら 是ハ中々おさまらん きつて
いるものハわかる わからんものハ 雨風もなけりや 風もな
けりや 晴天でもなけりやならんへの中の里から さとるな
ら 何もいふ事ハない きゝなから ほつてをけば とおもな
らん なるほど おさまるなら きゝわけゝつこふな国の柱
何時とんな風かふくとも 雨かふるともわからん とれたけの
道を通るにも 雨風の道ハとをりにくい これハあまいから」
(74才)

いのはしまり おもふ心をゝさめてくれるなら ことしもだん
へさかんやなと云ふ中に 雨風むら雲にまかれぬよふ

22 廿七年一月廿二日 夜一時廿分 御本席様身上

さあへあさおきる くれるへと 身しきりてくる とを
ゆふ事情へ 事情くらいなら なんてもあるまい よふ」
(74ウ)

しごとを きいておけ いさゝかとなる ものがとなる
大きいものがとなる 此二ツの里がむつかしいへとれハと
のくらいむつかしいとおもふ とんな事もたんじへて くれ
にやならん だんじとゆふ ぬけめのなきよふ もふ何時や
へ 夜かふけると云ふよふな事てハ なにほどよふても な
にもならん みな一ツの心よせたら しきに此場でをさまるも
のや きりの中の」(75才)

雨の中の 風の中二おいたるものや 晴天も一夜の間にとんな
事にかわるともわからん あちらから一寸もつてつけ こちら
からひつける 是ハ雨かふれハ一寸 風がふけハ一寸むくれる
これへめんへの事といふ里をおもへハ ひきつけるよふな
事してハならん しのなきもの なんほ聞かしても なんに
もならん こたへのなき処へ もていた処が何にもならん そ
こから くれつくともむける」(75ウ)

心に一ツの事情おもわずしてハ ひゝつけるもおなし事 おも
である事情ハ 大へんともいふ 事情をさとしかけたら てか
けるにわ あともむこふも むけるやろふ なれど なれどせ
ん事上へてたら あとむく事でけん けふハとをと 一ツの心
定めるよりしよふがない 朝といふ夜かあげたら事情といふ
人々つかへてある ゆわばかたらず こせんハもむないなから」
(76才)

にも つねにもわからんよふに たへている 是がほんまに
これかほんまに たへられんよふになつたら とをすど きよ
の晴天 あすの雨風わかろまい 何ほどへ心につろふとおも
ふても 身がうこかねバ とをもならん きよのあさやかしれ
よまい 是一ツよくきゝとつてくれるかよい
押て願ひ」(76ウ)

さあへよふきゝわけにや とをもならん 十人の中 おやハ
いへハ親 兄弟と云へハきよだい いとこといゑバ これから
さき うすくなる 他人かたにんやない 身かみやない 是一
ツきゝわけたら 何かの事情も ミなわかる

(注) 正本と比べると、とくに最初の個所は、かなりの相違
を見る。例を挙げれば、「くれるへと身しきりてくる」は「く
れへと身の処事情出来る」である。

23 廿七年二月一日 山澤小人為信身上

さあへたすねる事情 いかなる事 一時の処 事情大せん
へおもふ処 所々」(77才)

といふ事である こふゆふ事てなる ゆわすおもわず 一時身
上 大へんへ事情とゆふ とをなるへおもふ 所々といふ
事情かたてあう 何たる事たてあう さしずむつかしいといへ
ハ とをなる とをてあるとおもふ 身上ハ一寸一時 さあこ
れ一ツの処 此屋敷へへの中 一手につもりた処 一日の
日 事情ハあらへけうこふおさまり 事情よふきゝとれ 小
人身上さわる 一寸一ツたゞ」(77ウ)

こふて とをゆふ事とおもふ さとしハ一寸しにくい 咄しハ
せにやならん 年かあげたら 一ツ事情 おもいかけない事情
はしめかけたる はしまる とふく処も はしまりとをもふ事
かありても みなへの心をよせてくれ こんな事なるとおも
ふ せんへより一寸さとしたる いやがおゝでもでる 世上
十分くもりきつてある さあ あすからやへといふ事情にな
りてある 大もうな」(78才)

事もたのみにくる 一日一日はやくなる 大せん心をゝさめに
やならん とふてもこふゆふはなしをしけるならあんじる
あんしる事いらん とこからとをゆふ事ゆふても たゞ此道と
んな事いふても いさゝかの心にもおさめぬよふ 又一時小人
なる処 一日のかたつ やれへ事情たゝこふ 小人ちいさい
よふにおもふ ちいさいやないやない とれからいつても一ツ
せかい」(78ウ)

一ツの事情にとつておさめてくれ 一寸身上たいそふなよふな
ものなれと 一寸へ

押ての願ひ

さあへみなこれまで 道すからはらへといたる わかり
てもわからいでも たつてしもふた 一人がこれと云ふ 又一
人がこふと云ふ 里をたてんよふ いくゑのはなしも とりき
まり よるへ」(79才)

なかびいた咄しハいらん 一ツたすねて こふとさしずの里を
たすねるよふ こちらの心の内で こふといふよふでハ とを
もならん これまで道の里 さしずの処の里とあわせてくれ
とんな事もあぶなきへといふが神の道 是一ツよくへきゝ
とつてくれ

(注) 「大せん」という表記が2度でてくるが、正本によれば、〈大
変〉である。

24 明治廿七年二月十日 旧正月五日 御本席様御身上願

(79ウ)

さあへとゝかん日をまつているへへへいるから 身
上もとゝかん とどかん日をまつて 身上もとゝかん たより
てハあるふまい 是までことハ一ツの里てした事ハ みなてき
である こふといふたら みなちやんとてきてくる なれとゞ
をもならん ほつとにごりかけたら とをもならん とをでも
こふても すまさにや「とをも」ならん にごりかけたら 力
けんかかわる 日々いふた事ハで」(80才)